

第 1 回：イントロダクション

なぜ世界を知るべきか？ そして、なぜ A 級を知るべきか？

1. はじめに：学ぶということ

- ・ 自分の(心が)学びたいことを学ぶ：「100人の村」で大学生はたった一人、大人を含め世界の99人がうらやむ存在 ▶ 単位(モノ・成果)のために勉強するべきではない ▶ 勉強の最大の報酬は単位(モノ)ではない、学ぶということ(心)そのものにある ▶ 単位のために勉強をはじめた瞬間に、「しなければならないこと」になる
 - 心から好きなことを見つける ▶ 好きなことが見つからなければ、今やることを好きになる。好きになれなければ、好きになる方法を考える ▶ 諦めずに探し続ける
 - 授業がつまらないのは、半分は貴方のせいではない ▶ しかし、学びを面白くするのは貴方次第
- ・ 学び方を学ぶ：バックミラーとフロントグラス ▶ 何を学ぶのか？ ▶ 「大学で学んだこと(バックミラー)は何も役に立たない」という人がいるが、当然である ▶ 大学に限らず、社会は、(学生時代に)学んだことで仕事が成り立つほど、甘くない ▶ 大学は「学び方(フロントグラス)を学ぶ」場所である
 - 「学び方を学ぶ」とは、知らない分野に飛び込んで成果を上げるということである ▶ 永遠の素人として生きるということ ▶ 残りの人生で無限の学習が可能になる ▶ 知識を得るのではなく、考え方を学ぶ ▶ 成果を上げることよりも、間違いを恐れない心を鍛える
 - 「考えること」、「自分の言葉で語ること」、「意見を恐れずに口にすること」、「自分の意見を行動に移すこと」
- ・ 「楽なこと」と「楽しいこと」は、似て非なるもの：人生はパイナップル畑の草刈りに似ている…

雑草に腰の高さまで覆われた畑を目の前にして、戦わずして家に帰ってしまう人がいる。クーラの効いた自宅に帰って、テレビを見て暮らしながら、なぜ自分の人生には「収穫」がないのかと一度しかない人生を嘆いて過ごしている。

ある人は、「楽しく」働くために、「楽しく」草を刈れる場所がないかと、雑草に覆われた畑の周辺を何周も何周もしている。自分が「心から打ち込める」理想の草刈りを探し求め、どの場所から刈り始めるのが「最短」かをいつまでも考えている。

「自分探し」「充電期間中」と言いながら時間を稼ぎ、そのうち、どこからともなく良いことが起こることを漠然と期待しながら、人生そのものを先延ばし、時間をつぶしそのまま一生を終える。きっとこの人は、「楽しい人生」と「楽な人生」を混同しているのである。

多くの人は、いかに草刈りを避けるか、楽に草を刈るか、ということに意識と時間を割くが、人生を豊かにする唯一の方法は、そんな中途半端な効率の議論よりも、今すぐ、まずは一人で、できることから、膨大(に見える)な作業量に怯まず、目の前の草を刈り始めることでしかない。

草刈りに向かう姿が、真摯であることを見た一人が、やがて作業を手伝うようになり、その姿勢に嘘がないということを知れば、いつしか多くの人が畑にやってくる。

人生のゴールを目指して、広大な草刈りを「効率的に」完了しようと、誰もが「成果」を求めるが、実は、草刈りそのものが、作業の最大の報酬だということを理解できれば、その瞬間から人生は全く別の意味を持ち始める。

今までは無駄だと思っていたこと、最大の障害だと思っていた「草刈り」自体に、そして、自分がそれいかに対峙するかということに、人生の本質と意味とそして、想像を遥かに超える幸福が隠されているということを悟るのだ。

「楽しい人生」は「楽な人生」と似て非なるもの。最も厳しい人間関係、最も妥協のない生き方、最も単純な役割、最も純粋な愛、最も辛い仕事・・・は「楽な人生」ではないかもしれないが、「楽しい人生」を送るための近道かも知れない。

- **鏡を見つめる**：講義の内容を疑うべき、講義の内容が「正しい」と考えないように ▶ あなただっただらどうする？ ▶ 間違っていようといまいと、自分の結論を出しながら進む(人生と同じ)
 - ◇ 人の意見を聞いて、鏡(自分)を見つめる、自分自身を知る
 - ◇ 多くの人にとって、最も怒りを感じることは、自分についての真実である ▶ 真実を避けるか？真実に向き合うか？
 - ◇ 自分の問題を直視することと、肯定的である(受け入れる)ということ、は矛盾しない ▶ ありのままを受け入れるということ

2. 私の全講義に共通する目的 ▶ 沖縄再生

- ・ あなたは明日の沖縄をどうするか？
 - 講義の明確な目的 ▶ 沖縄を再生するための、飛躍的、合理的、科学的な事業計画の構想と検証
 - ◇ 私は大学時代、先生に目的を問い正してゼミから破門された経験があるが、その考え方は今も同じ ▶ 学問は実行してこそ意味がある、学問は社会を良くするためにある
 - 私が定義する観光学とは、地域(沖縄)再生学である
 - ◇ 沖縄の観光を考える ▶ 産業(観光収入)としての観光、質としての観光、雇用としての観光
 - ◇ 一般的な観光学の講義とは異なる
 - 地域再生とは、自立経済、豊かな生活(収入と時間)、共同体 ▶ これらを実現することが一義
 - ◇ その方法として、沖縄においては観光が最右翼、という順番(地域再生の手段として観光が相応しくない地域もある)
 - ◇ 観光をどうするか？の講義ではない。社会をどうするかが最大の問題
- ・ 地域再生の視点から観光を捉える ▶ エコだけを考えるなら、何もしない方が良い ▶ 経済効果とのバランスにおいて考える、地域・産業・社会再生論である
 - 沖縄の将来を支える観光産業は、沖縄県の経済規模4兆円のうち、波及効果を合わせて1兆円を占める(観光収入は4000億円)
 - 沖縄の現状と課題 (▶ 基地経済は「観光経営論」に譲る)
- ・ 観光地沖縄の持続的発展
 - 短期間(とはいえ、それが数十年継続することもある)の成功は、誰でも実現できる
 - 現在の沖縄観光は、持続性があるのだろうか？ ▶ 持続性を生むために、どうすれば良いだろう？
 - 沖縄に本物(一流)を生み出すために、何ができるか？どうするか？

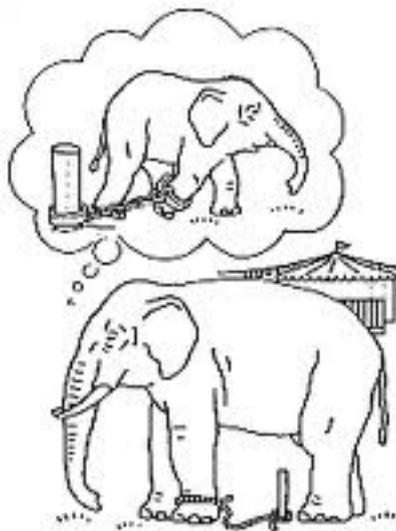
3. 講義の目的

・ 講義の目的1 : 立体的に考える

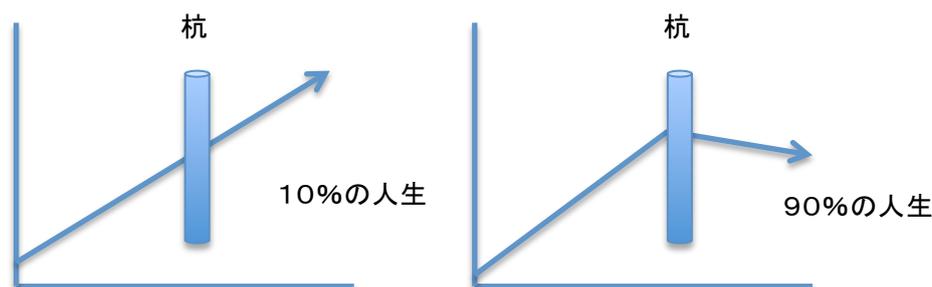
- 現実世界は「ルービックキューブ」 ▶ 立体的に考える、立体的に学ぶ
 - ◇ 世界をルービックキューブ(生態系)として捉えてみる ▶ 一面だけの解を求めると、必ず他の面に影響を与える(多くの場合、新たな問題を生み出してしまう) ▶ 現実社会において、部分最適は必ずしも全体を最適化しない
 - ◇ 繰り返しの重要性 ▶ 立方体は、一つの面が複数の面と隣り合っている ▶ 立体感を捉える過程では、同じ要素が繰り返し登場する ▶ 同じ概念が繰り返されても、立体的な位置づけが異なる
 - 中学生の頃読んだ本を読み返すと、全く違って感じられる ▶ 同じ本から全く異なることを二度学ぶ ▶ 知識ではなく、発想、思考、知恵を学ぶときの大きな特徴

・ 講義の目的2 : 世界観を広げる、制約を取り払う

- サークスの子象
 - ◇ 子象が杭に鎖でつながれると、始めは命を懸けて逃げようともがくが、そのうち自由になることが不可能だと諦める ▶ 一度逃げることを諦めた象は、その後どんなに大きな体に育っても、自分の力を発揮する意思を失う
 - ◇ 殆どの人(大人象)は、そこに(自分が選択可能な)選択肢が存在するという可能性すら考えもしない



- 制約とは、「子象にとって」の制約に過ぎない ▶ 子象にとっての制約を一生の制約として生きるか？ 制約を乗り越えて大人象に成長を遂げるか？
 - ◇ 「杭」は本当の制約ではない、制約はそれを制約と認める、あなたの心の中(世界観)にある
 - ◇ 誰にとっても、乗り越えられない試練(杭)は与えられない ▶ 乗り越えられないと考えた瞬間、それが現実になる
 - ◇ 自分にとっての「杭」とは何だろう？ 人のせいにする気持ち？ ▶ 自分の人生の責任を取ることで、杭を引き抜く



- 知らないこと、間違えることは、なによりもプラス
 - ◇ 知らないということは、新しいことに挑戦している、何よりの証拠
 - ◇ 間違えることは、自分の経験を超えた挑戦をした(杭を乗り越える)ことの結果

- 世界に出よう！杭を乗り越えよう！
 - ◇ 実のところ、講義を受けているよりも、バックパックで海外に出る方が100倍勉強になる
 - ◇ 沖尚出身者は興南の同窓会に出席してみたら？ ▶ 本土で働く、海外で働く…

・ **講義の目的3**: 一流を知る、一流の存在を知る

- なぜ一流(オンリーワン)でなければならないか？
 - ◇ リゾートホテル等の事業構造 ▶ 売上高利益率5%程度 ▶ 価格の差は莫大な利益の差
▶ ホテルは陳腐化すると、ただでさえ価格が下がる宿命 ▶ 大きな資本を背負いながら
価格を下げることは自殺行為に近い
 - ◇ 価格を維持し、上昇させるためには、オンリーワンでなければならない ▶ 沖縄観光の再生は A 級リゾートへ踏み出すことから始まる
 - ◇ 沖縄の県政、観光産業、リゾートホテルの社員、経営者で、一流のリゾートや観光地を体験している人は少ない ▶ 皆が一流を経験しなければ、沖縄は永遠に B 級リゾートのまま
▶ B 級リゾートが顧客を呼び込むためには、価格を下げなければならない ▶ 価格を下げれば、利益は生まれない ▶ 利益がなければ、ホテル業界で働く従業員は、永遠に安月給のまま ▶ 質の低い従業員は質の低い顧客を引きつけ、利益率が更に低下し、破綻に至る

- 一流を定義する
 - ◇ ミシュラン三ツ星の定義：「そのために旅行する価値がある、卓越した店」(因に二ツ星の定義は、「遠回りしてでも訪れる価値のある、素晴らしい店」)
 - ◇ 一流と二流を分けるものは何だろう？ ▶ 一流とは人の「意識(向上心、誠意、情熱) × 時間」の累積量 ▶ 一流のモノやサービスや人を見て、その影でどれだけのエネルギーが投下されたかのボリューム感を理解することが重要 ▶ 一流のものに触れることの重要性は、それらを生み出した人の意識を理解すること
 - 一流は一流の生き方によってのみ生み出される ▶ 一流を支える人、生き方を理解する ▶ 「一流のもの」と「一流の人」を対比して考えてみる
 - 一流を経験しなければ、何が一流かを知ることは出来ない ▶ おいしいものを食べなければ、何がおいしいか理解することは出来ない
 - ◇ 質の時代 ▶ 質を量に転換し続けた100年が終焉？ ▶ 質の時代は、オンリーワンだけに価値がある ▶ 2番手は20番手と変わらない ▶ 観光地は1年に1カ所しか選択しない、2番手の場所に敢えて行く理由がない ▶ 現在、沖縄観光のオンリーワンは、①美ら海、②首里城、③離島しか残っていない

・ **講義の目的4**： 心で感じる、直感を信じる

- 「境界を越える」ということは、自分の常識(頭)を超えるということ ▶ 心(直感)に従うことが大きな助けになる
- ①人を引きつける要素、②心を動かす要素、についてのインスピレーションを得ること、そして、③自分が引きつけられるもの、④自分の心が動かされるもの、に向かって行動すること ▶ これが、沖縄の将来を支える要素の基礎となる
- イノベーションは心から始まる ▶ ソニーのウォークマン、アップルの iPhone ▶ 人が求めるものではなく、自分の心が望むものを形にすることが、革新を生み出す
- 何が一流か、あなたの心は既に知っている
 - ◇ コーヒーの注文、スタバのオーダー、レジのおつり・・・
 - ◇ 誰かに教えられたことではなく、自分の直感を信じる
 - ◇ 人を惹き付ける要素とは？人が惹き付けられる理由とは？なぜ人はそこを訪れるのだろうか？

4. 課題と評価

- ・ 講義が最も重要、出席重視
- ・ 基本的に知識は二次的なもの ▶ 考える、自分の言葉でしゃべる(書く)、自分で感じる、境界を越える
- ・ ホテルを利用してのレポート、サービス業との接点に関するレポート(考え中)、期末テストは予定しない
- ・ 講義メモは配布する